

Citation: Salpeter SR, Greyber E, Pasternak GA, Salpeter (posthumous) EE. Risk of fatal and nonfatal lactic acidosis with metformin use in type 2 diabetes mellitus. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2010, Issue 1. Art. No.: CD002967. DOI: 10.1002/14651858.CD002967.pub3.

CRG名: Metabolic and Endocrine Disorders

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 7 October 2009

Clib issue No.; N/U: 2010 issue 1, Update

背景: 2型糖尿病治療においてメトホルミンは他の血糖降下薬と比較して、総死亡率を低下させることが示されている経口血糖降下薬である。しかし、メトホルミンは乳酸アシドーシスのリスクを増大させると考えられており、心臓血管疾患、腎疾患、肝疾患、肺疾患、ならびに高齢など乳酸アシドーシスを伴う可能性のある多数の慢性的な低酸素血症状態には禁忌であると考えられている。

目的: プラセボまたは非メトホルミン療法との比較で、メトホルミン治療中の患者を対象に致死のおよび非致死な乳酸アシドーシスの罹患率を明らかにし、血中乳酸値を評価する。

検索戦略: メトホルミン治療に関する研究を同定するために電子データベースを包括的に検索した。同定した論文の参考文献を入念に調べ、研究代表者に問い合わせを補強した。

選択基準: メトホルミン単独または他の治療との併用を、プラセボまたは他の血糖降下療法と比較評価している場合に、1か月以上の2型糖尿病患者を対象とした前向き試験および観察コホート研究として含めた。

データ収集と分析: メトホルミン治療および非メトホルミン治療に対して致死のおよび非致死な乳酸アシドーシスの罹患率を、患者-年あたりの症例数として記録した。症例の真の罹患率の上限はポアソン統計を用いて計算した。第二の解析では、治療群および比較群について、乳酸値をベースラインからの正味の変化、または治療中の平均値(基礎ならびに食事または運動による刺激後)として測定した。統合した結果は、連続データについては固定効果モデルを用いて、mmol/Lで重み付け平均差(WMD)として記録した。

主な結果: 347件の比較試験およびコホート研究からの統合データから、70,490患者一年のメトホルミン使用群、または55,451患者一年の非メトホルミン群において致死または非致死な乳酸アシドーシスの症例は存在しないことが分かった。ポアソン統計を用いた場合に、100,000患者一年あたりの乳酸アシドーシスの真の罹患率の上限は、メトホルミン群では4.3例、非メトホルミン群では5.4例であった。メトホルミンを非メトホルミン療法と比較した際に、治療中の平均値またはベースラインからの正味の変化のいずれも乳酸値に差を認めなかった。

レビューアの結論: 前向き比較試験または観察コホート研究から、メトホルミンが他の血糖降下治療と比較して、乳酸アシドーシスのリスクを増大させたり、乳酸値を上昇させることを示すエビデンスはない。

(監訳 曾根正好)

翻訳公開日: 10年4月15日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。